

展示記録

魯迅記念展示室常設展
魯迅と東北大学 —歴史のなかの留学生—

永田英明

開設の経緯

魯迅記念展示室は、東北大学史料館が所蔵する、仙台医学専門学校在学時代を中心とする魯迅の関連資料を広く一般に紹介するための展示施設として、平成23年7月19日（火）にオープンした展示室である。

魯迅が在学していた仙台医学専門学校は、明治34年に第二高等学校医学部が独立する形で発足した明治期最北の官立医学専門学校で、明治45年（1912）に東北帝国大学医学専門部として本学の附属学校となり、東北帝国大学医科大学発足に伴い廃止された。こうした経緯から、同学校の公文書は廃止後附属学校の文書として本学に引き継がれ保存されていた。

旧仙台医学専門学校の公文書中に魯迅に関する記録が含まれていることは魯迅没後間もない頃からすでに知られており（飯野太郎「仙台医学専門学校時代の魯迅について」『良陵』39号

1937年）、戦後も菅野俊作氏（元東北大学教養部教授）らによる調査や、1973年から77年にかけておこなわれた「仙台における魯迅の記録を調べる会」による調査で多くの資料が調査・紹介された（『仙台における魯迅の記録』1978年平凡社）。こうした経緯を経て旧仙台医学専門学校の公文書は1974年12月に事務局庶務課より東北大学記念資料室（現史料館）に移管され、以後現在に至るまで当館で保存されている。またその一部については常設展示室の「仙台医学専門学校」の紹介展示の一環として展示公開されてきた。

こうした公文書資料に加え、近年では上記「仙台における魯迅の記録を調べる会」の調査で発掘した学外の関係資料（同級生や下宿の関係者が所蔵していた文書、写真等）なども当館に集約されるようになり、また2010年には、故高良とみ所蔵の魯迅自筆書幅が本学に寄贈され当館の所蔵品に加えられるなど、関連資料が次第に充実しつつある状況にあった。同時に、魯迅以外の留学生にかかる関連資料の調査等もすすみ、国際交流や留学生教育への活用という観点からも、こうした関連資料を集約的に展示紹介する施設の整備が課題となっていた。

折しも2010年4月、中国をはじめとした東アジアとの国際交流の推進を目的に設立された「仙台日中交流連絡会議」（のち「魯迅が育む仙台日中交流連絡会議」）から本学総長宛に「魯迅記念館」の建設に関する要望書が提出されており、こうした学外の要望等も踏まつつ学内での検討を進めた結果、東北大学史料館内に確保できる新しい空きスペース（旧法科大学院第四講義室）を活用する形で、当史料館内に展示設備としての「魯迅記念展示室」（仮称）等を設けることが計画され、平成22年度総長裁量経費による採択を経て、当館と総務部広報課の担当事業として整備が進められた。

なお本来であれば平成23年3月中に整備が完了し、同年4月より開設される予定であったが、



3月11日以後の東日本大震災の影響で予定が大幅に遅れ、7月19日より一般公開を開始することとなった次第である。開設に際してはポスター・チラシ等を学内諸部局、学外の関係機関および宮城県内高等学校、仙台市内中学校等に配布をおこなった。記念行事等については、東日本大震災による史料館本館の補修計画との関係もあり7月には実施せず、後述のように9月28日に実施した。広報としてはこのほかホームページの開設も予定しているが、こちらは平成23年度内開設の予定で現在準備中の段階である。

展示公開開始後の一ヶ月ごとの見学者数は下記の通りである(12月18日現在)。

期間	人数	期間中の関連行事等
7/19～8/18	245	
8/19～9/18	232	
9/19～10/18	955	9/28 オープニングセレモニー、10/7,8 片平まつり開催
10/19～11/18	337	
11/19～12/18	232	

常設展示の概要

展示は、魯迅の作品「藤野先生」のストーリー展開を参考に、東京弘文学院卒業後仙台医学専門学校に入学してからの学生生活や藤野先生との交流などを中心に以下の順序で構成した。

1. はじめに(ケース1台)
2. 魯迅の足跡(パネルのみ)
3. 東京から仙台へ(ケース1台)
4. 仙台医学専門学校入学(ケース1台)
5. 医学生・周樹人(ケース3台)
6. 藤野先生(ケース2台)
7. 医学から文学へ(ケース1台)
8. 「惜別」(ケース1台)
9. 魯迅と「藤野先生」(ケース1台)
10. 学都仙台留学生小史(ケース1台)
11. 高良とみ旧蔵魯迅書幅(ケース1台)

この構成は、当館が2009年7月に「史料館ガイドブック」の1冊として発行した図録「魯迅と東北大学—歴史のなかの留学生」の構成を基本的に継承している。記念展示室の開設により、同図録は今後は魯迅記念展示室の展示図録としての性格を持つこととなった(東北大学生協各店舗で発売中)。

展示物は前述のように当館が所蔵する仙台医学専門学校公文書中の魯迅に関連する記録を中心に、その他の関連資料を加えて構成したもので、常設展示となるため原則としてレプリカを作成・使用している。また本展示室には多数の中国人来訪者が見学に訪れることが予想されるため、展示パネルおよびキャプションについては日本語と共に中国語をあわせて表示することとした。展示パネルや展示資料の詳細については後掲「魯迅と東北大学—歴史のなかの留学生展示資料解説・目録」を参照されたい。

オープニングセレモニーおよび開設記念ミニ展示

9月28日(水)に、魯迅記念展示室の開設記念行事として、程栄華駐日中国大使をはじめ多数の来賓出席のもとオープニングセレモニーを実施した。セレモニーでは井上明久総長のあいさつ、程大使の祝辞につづいてテープカットがおこなわれ、その後展示室の見学会を実施した。

このセレモニーに先がけ、当日午前中にはエクステンション教育研究棟2階講義室にて記念講演会が開催され、下記の二つの講演がおこなわれた。

汪婉(中国社会科学院近代史研究所研究員・駐日中国大使夫人)

「近代日中教育交流史における「日本留学と日本遊歴」

末松和子(本学経済学研究科准教授)

「経済学研究科における中国人留学生への教育支援 ―東日本大震災を乗り越えて―」

汪婉氏は『清末中国対日教育視察の研究』(1999年汲古書院)など日本でもその研究成果がよく知られている中国近代教育史の専門家であり、魯迅をはじめとする留学生たちの日本留学の意味を専門家の視点から論じられ、末松准教授の講演とともに、まさに当記念展示室のオープニングにふさわしい興味深い講演となった。この講演会は教職員・学生のほか市民にも公開され、66名の参加者があった。講演後には活発な質疑応答も行われ、国際交流の歴史と現在に対する関心の高さがうかがわれた。

また、このオープニングセレモニーにあわせ、魯迅記念展示室開設記念のミニ企画展として、9月5日から10月2日まで、上記展示の一部を拡充するかたちで、魯迅記念展示室開設記念ミニ展示「学都仙台の留学生たち―戦前期東北大学の日中交流―」展をおこなった。蘇歩青ら上記3名に加え、鄭貞文、馬廷英、蘇子蘅、由其民、謝健弘といったかつての留学生について関連資料の展示紹介等をおこなった(展示内容については後掲)。また10月1日、2日の両日は休日開館も実施した。

魯迅記念展示室の開設にあたっては、上述の魯迅が育む仙台日中交流連絡会議(会長:大内秀明名誉教授)、宮城県日中友好協会(会長:江幡武名誉教授)、日本中国友好協会宮城県連合会(会長:阿部兼也名誉教授)等の諸団体や高良真木・留美子氏(高良とみご息女)等の方々に多大なご協力をいただいた。また中国語解説の作成に当たっては東北大学大学院文学研究科の葛睿氏に全面的なご協力をいただき、写真等の利用については北京魯迅博物館、福井県あわら市にご協力をいただいた。この場を借りて御礼申し上げる次第である。



魯迅と東北大学—歴史のなかの留学生—

付 ミニ展示「学都仙台の留学生たち」

展示資料目録・解説 —解説パネル・展示キャプションより—

1. (導入展示)

1-1 あいさつ〔パネル〕

1904年(明治37)秋、1人の中国人留学生が、医学の道を志し、東北大学の前身である「仙台医学専門学校」に入学しました。彼の名は周樹人。のちに『狂人日記』や『阿Q正伝』等の作品によって中国文学に新しい息吹を吹き込み、近代中国を代表する思想家として活躍した作家「魯迅」その人です。

留学生・周樹人の仙台での生活は、たった1年半にすぎません。しかしこの仙台にて、彼は「文学」の道を進むことを決心しました。彼がのちに作家「魯迅」として執筆した短編小説「藤野先生」には、異郷の地仙台での学生生活、文学への転向を決意する彼の心の動きが、ひとりの教師との交流を素材として綴られています。

この展示では、東北大学に遺されている資料をもとに、若き日の魯迅＝周樹人の仙台での留学生活をご紹介します。

1-2 魯迅解説〔パネル〕

魯迅(1881-1936) 本名：周樹人

浙江省・紹興生まれ。1902年春に官費留学生として来日。東京・弘文学院を卒業した後、1904年9月仙台医学専門学校へと入学。しかし在学中に文学者としての道を歩むことを決意し1年半後に退学。1909年に帰国した。

1912年、辛亥革命に伴い中華民国臨時政府の教育部に勤務するが、やがて陳独秀らが主唱する文学革命論に呼応し、1918年「魯迅」の筆名で「狂人日記」を発表する。その後「故郷」「阿Q正伝」等の代表作を次々に発表。やがて政府の弾圧を逃れ上海に移住し、晩年をこの地で過ごした。1930年には左翼作家連盟の結成に参加している。

儒教批判と口語文の提唱を柱とする「文学革命」を作品の中で実践し中国近代文学の基礎を築き、また絶えず鋭い社会・政治批判を展開した、20世紀前半の中国を代表する文化人。

1-3 「藤野先生」手稿(複製本)

『魯迅手稿』(1964年文物出版社)所収

1-4 中国の国語教科書における「藤野先生」

1995年人民教育出版社刊『中学語文』

1-5 日本の高等学校国語教科書における「藤野先生」

2010年東京書籍『現代文』

1-6 魯迅の足跡〔パネル〕(省略)

2. 東京から、仙台へ

2-1 テーマ解説〔パネル〕

東京から、仙台へ

中国留学生会館の入り口の部屋では、本を若干売っていたので、たまには立ち寄ってみる価値はあった。午前中なら、その内部の二、三の洋間は、そう居心地は悪くなかった。だが夕方になると、一間の床板がきまってトントンと地響きを立て、それに部屋中煙やらほこりやらで濛々となった。消息通にきいてみると「あれはダンスの稽古さ」ということであった。

ほかの土地へ行ってみたら、どうだろう。

そこで私は、仙台の医学専門学校へ行くこととした。(「藤野先生」より)

1902年(明治35)春、南京の江南陸師学堂を卒業した周樹人は、浙江省の官費留学生として日本へ渡り、東京の「弘文学院」に入学した。20歳のときである。

当時東京には、こうした留学生向けの学校で学ぶ多数の「清国留学生」がいた。彼らは留学生会館などに集っては政治や文化について語り、行動した。周樹人もまたこの留学生社会の一員として、浙江省の同郷会誌である『浙江潮』に小説や論文を投稿したり、学校の教育方針に抗議するストライキに参加したりしている。

しかし、彼は一方でこうした留学生社会に対し、冷めた視点をも持っていた。やがて医学を志した周樹人は、弘文学院卒業後の進学先に、仙台の医学専門学校を選ぶ。留学生が誰もいない場所、というのがその理由であった。

2-2 弘文学院時代の肖像〔写真〕

1904年(明治37)

2-3 紹興出身学生との記念写真〔写真〕

1904年(明治37)春後列右が周樹人。その左は生涯の友となった許寿裳(きよじゅしょう)

2-4 神田駿河台の清国留学生会館前で〔写真〕

1902年(明治35)秋浙江省同郷会での記念撮影。4列目右から6人目に周樹人。

2-5 小説「スパルタの魂」(復刻本)

1903年発表／『漸江潮』第五期所収「自樹」の筆名で執筆した、古代ギリシャを題材にした小説。

2-6 論文「中国地質略論」(復刻本)

1903年発表／『漸江潮』第八期所収中国鉱産資源の分布状況をまとめその重要性を指摘することで、列強による資源略奪に警鐘を鳴らした論文。「索子」の筆名で執筆した。

2-7 周樹人の入学に関する清国公使館より仙台医学専への照会状(複製)

光緒30年4月6日(1904年5月20日)当館蔵仙台医学専門学校文書『生徒募集ニ関スル書類／明治三十五年以降』より南洋官費留学生周樹人の入学について、清国駐日公使楊枢が、仙台医学専門学校の校長に打診した文書。

3. 仙台医学専門学校入学

3-1 テーマ解説〔パネル〕

仙台医学専門学校入学

1904年(明治37)9月12日、仙台医学専門学校の明治37年度入学式が片平キャンパス内の講堂で行われ、周樹人は医学生としての生活をスタートする。同級生は前年度からの落第組を含めて145人。翌日からは授業が開始された。

仙台医学専門学校は、1887年(明治20)に「第二高等中学校医学部」として発足し、1901年(明治34)に専門学校として独立した、当時北日本でただ一つの医学専門学校である。周樹人が来仙した当時は入学志望者が増加し、東北地方各地から、医者を目指す若者たちが集まっていた。

3-2 周樹人の仙台医学専門学校入学を報じる新聞記事(写真)

『東北新聞』明治37年(1904)9月10日

仙台初の留学生周樹人について、巧みに日本語を操る「なかなか快活鳴る人物」とする。

3-3 仙台医学専門学校の教授と学生(写真)

1905年魯迅一年級在学時の教授と最上級生。2列目中央に山形仲藝校長。3列目左から2人目が藤野厳九郎教授。

3-4 第二高等学校・仙台医学専門学校正門(写真)

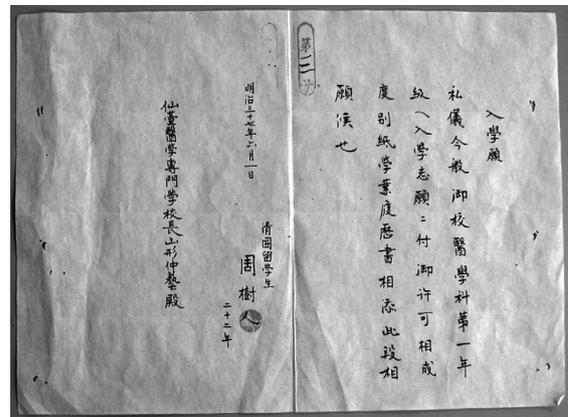
現在も門柱が遺されている。魯迅の入学した仙台医学専門学校は、旧制第二高等学校と同じ敷地にあり、講堂や運動場など一部の校舎は両校が共同で使用した。

3-5 周樹人入学の件清国公使館への回答状(複製)

1904年(明治37)5月23日 当館蔵仙台医学専門学校文書『生徒募集ニ関スル書類／明治三十五年以降』より

3-6 周樹人の入学願書(復原資料)

1904年(明治37)6月1日 当館蔵清国公使館を通じ無試験入学の内諾を得た周樹人が提出した自筆の入学願書。



3-7 周樹人学業履歴書(復原資料)

1904(明治37)年6月1日願書の添付書類。「南京官立江南陸師学堂普通科」および「東京私立弘文学院速成普通科」卒業、とある。

4 医学生・周樹人

4-1 テーマ解説〔パネル〕

医学生・周樹人

入学して間もない頃、周樹人は中国にいる友人に、仙台での学生生活の様子を伝える手紙を送っている。この手紙から魯迅の学生生活をのぞいてみよう。

下宿生活

この地はなかなか寒いのですが、昼間はいくらか暖かです。風景はよいのですが、下宿はまったく劣悪です。東桜館（東京での宿舎のこと）のようなところは求めようとしても絶対にできません。いわゆる旅館にしてはいろいろに広くありません。いま住んでいるところは月額たった八円です。人通りが前にあり、西日が後ろから射します。毎日食べさせられるのはいつも魚ばかりです。いま、土樋町に引っ越そうと思っていますが、そこも、いいところと言うわけがなく、ただ、学校に近く、いくらかあたふたせずにすむというだけのことです。

（1904年10月友人・蔣抑卮あて書簡より）

4-1-1 広瀬川付近から片平方面をのぞむ（1913年頃：写真）

右側奥に旧制二高・仙台医専の校舎。魯迅の最初の下宿・佐藤屋は左奥の川縁あたり。周樹人もこの清流を散策したのだろうか。

4-1-2 桜小路 医専東門付近（写真）

現在の東北大学片平キャンパス流体科学研究所付近。周樹人は東門付近の桜小路に面した「晚翠軒」というミルクホールに出入りしていたという。

4-1-3 仙台駅（写真）

1894年に建てられた2代目の駅舎。

4-1-4 芭蕉の辻（写真）

江戸時代には、仙台北下のメイン・ストリートが交差する場所として栄えていた。

4-1-5 周樹人の名前が書かれた『入学志願者名簿』

1904（明治37）年7月

当館蔵 仙台医学専門学校文書『医・薬学科入学志願者名簿／明治三十七年』

4-1-6 周樹人への入学許可書発行指令案

明治37（1904）年9月1日

当館蔵 仙台医学専門学校文書『入学試験書類／明治三十四年七月』

周樹人本人への入学許可通知。「授業料免除」とある。友人への手紙によれば、免除された分のお金は「時計に化けた」らしい。

4-1-7 仙台時代の魯迅関係地図【パネル】（省略）

4-2 テーマ解説【パネル】

学業生活

学校の勉強はたいそう忙しく、毎日息つく間も

ありません。七時に始まり、午後二時に終わります。受けている授業は物理・化学・解剖・独乙（独逸語）などの学でどれもみな早くすすみ、応接にいとまがありません。組織・解剖の二科目の名詞はみなラテン語とドイツ語を併用しますので、毎日必ず暗記しなければならず、頭がとみに疲れます。しかし教師の言うことはよくわかりますので、もし幸いに卒業できましたら、人を殺す医者にはならないであろうと自分で思っています。

（1904年10月 蔣抑卮あての書簡より）

同級生だった学生が後日語るところでは、周樹人は真面目な学生で、教室では2、3列目の中ほどに座ることが多かった、という。

4-2-1 仙台医専校舎図【写真】

明治37年（1904）7月

医学部良陵同窓会所蔵

4-2-2 第一学期医学科第一年級日課表

明治37（1904）年9月

当館蔵 仙台医学専門学校文書『明治三十七年度 医学科・薬学科日課表』

周樹人が最初に受けた授業の時間割。授業は朝七時から午後二時まで。藤野教授の解剖学は週4コマ組まれている。

4-2-3 周樹人一年級の学年成績表

1905年（明治38）7月

当館蔵仙台医学専門学校文書『明治三十七年度 一年級学年成績表』

席次は、全142人中の68番。おおむね「丙」であるが、一科目だけ「丁」となったのは、藤野・敷波教授が担当する解剖学。

4-2-4 医学科第一年級欠席調査票

1905年（明治38）2月

当館蔵 仙台医学専門学校文書〔欠席者調関係書類〕
下段右から二人目に周樹人の無断欠席一日が記録されている。周樹人が学校に姿を見せない時には、何人かの級友が見舞いに下宿を訪れたという。

4-3 テーマ解説【パネル】

日本人学生へのまなざし

この数日間、日本人学生社会のなかに入って、ほぼわかりましたことは、思想、行為の点では、中国青年の上にはいないときっぱり言いきれることであります。ただ、社交の点は活発で、彼

ら日本人のほうが長じていると言えましょう。

(1904年10月 蔣抑后あての書簡より)

周樹人にとって、仙台医専での学生生活は、たった一人で日本人学生社会のなかに入っていくことを意味した。当時の同級生によれば、日常会話にほとんど支障はなく、タバコを好みよく同級生に勧めたという。

4-3-1 仙台医学専門学校同級生との記念写真〔写真〕

仙台における魯迅の記録を調べる会提供
2列目右から3人目が周樹人

4-3-2 敷浪教授ドイツ留学送別記念写真〔写真〕

1905年(明治38)11月6日 当館蔵
四列目右から五人目が周樹人。二高講堂前にて。

4-3-3 仙台医学専門学校同級生との記念撮影〔写真〕

仙台における魯迅の記録を調べる会提供
後列右端が周樹人

4-3-4 第二の下宿・宮川家における同宿生との記念写真

1905年撮影 当館蔵
後列左端が周樹人。その左下は、旧制二高に在学していた中国人留学生・施霖。各人の「ひげ」は、家主の宮川氏がのちにかつての学生たちのその後を想像し書き加えたもの。周樹人は入学当初片平丁の「佐藤屋」に下宿したが、ある先生の薦めで土樋の宮川家に転居した。

4-3-4(2) 宮川家同宿生との記念写真(表面)

写真の裏面には、撮影八年後の学生たちの消息が書かれているが、「周君」「施君」は「不明」と記される。当時周樹人は北京にいた。

4-3-5 敷波教授ドイツ留学送別写真(表面)

当館蔵
藤野教授と共に解剖学を担当した敷波重治郎教授のドイツ留学に際し撮影した記念写真。四列目右から五人目に周樹人がいる。

4-3-5(2) 敷浪教授ドイツ留学送別写真(裏面)

同級生達の名前が記される。

5. 藤野先生

5-1 テーマ解説〔パネル〕

藤野先生

解剖学は、二人の教授の分担であった。最初は、骨学である。そのとき、はいつてきたのは、色の黒い、痩せた先生であった。八字ひげを生やし、眼鏡をかけ、大小とりどりの書物をひと抱

えかかえていた。その書物を講壇の上へ置くなり、ゆるい、抑揚のひどい口調で、学生に向かって自己紹介をはじめた—

「私が藤野巖九郎というものでして…」

うしろの方で教人、どッと笑うものがあった。つづいて彼は、解剖学の日本における発達を講義しはじめた。…(藤野先生)

「藤野先生」こと藤野巖九郎は、福井県出身の解剖学者で周樹人が入学した当時は30歳。ちょうど教授になったばかり。解剖学は一年生の必修科目で、藤野先生の授業は週4時間受講することとなっていた。

5-1-1 仙台医専四号教室〔写真〕

1910年頃『仙台医学専門学校在学記念帖』より当時の日課表によれば、周樹人が入学した当時藤野先生の講義ここで行われていた。最初の授業の場所もおそらくこの教室であろう。

5-1-2 藤野巖九郎教授〔写真〕

1874年(明治7)福井県に生まれ、愛知医学校卒業後同校の教員を経て、1901年(明治34)10月に仙台医専の解剖学担当講師として仙台医専に招かれ赴任した。周樹人が仙台に来たときには30歳で、この年教授に昇任したばかりであった。

5-1-3 藤野巖九郎 仙台医学専門学校教授辞令(複製)

1904年(明治37)7月

原資料はあわら市藤野巖九郎記念館所蔵

5-1-4 藤野巖九郎 自筆の履歴書(仙台医専文書)

当館蔵 仙台医学専門学校文書

5-1-5 同級生・小野豊三郎氏の解剖学受講ノート

小野志郎氏寄贈 当館蔵
藤野教授の講義の受講ノート。

5-2 テーマ解説〔パネル〕

一週間すぎて、たしか土曜日の日、彼は、助手に命じて私を呼ばせた。研究室へ行ってみると、彼は、人骨やら多くの単独の頭蓋骨やら—当時、彼は頭蓋骨の研究をしていて、のちに本校の雑誌に論文が一篇発表された—のあいだに坐っていた。

「私の講義は、筆記できますか」と彼は尋ねた。

「少しできます」

「持ってきて見せなさい」

私は筆記したノートを送出した。彼は、受け取って、一、二日してから返してくれた。そして、今後毎週持ってきてみせるように、と言った。持ち帰って開いてみたとき、私はびっくりした。そして同時に、ある種の不安と感激とに襲われた。私のノートは、はじめから終わりまで、全部朱筆で添削してあった。多くの抜けた箇所が書き加えられているばかりでなく、文法の誤りまで、一々訂正してあるのだ。それは彼の担当の学課、骨学、血管学、神経学が終わるまで、ずっとつけられた。（「藤野先生」）

5-2-1 藤野教授の研究室〔写真〕

（仙台医学専門学校在学記念帖より）

入学直後のある土曜日、藤野先生は周樹人を研究室に呼びノートを提出するよう命じた。

5-2-2 藤野先生が添削した魯迅のノート（複製）

原資料は魯迅博物館（北京）所蔵藤野教授の「脈管学」の講義。朱筆による添削の跡がよくわかる。

6. 医学から文学へ

6-1 テーマ解説〔パネル〕

医学から文学へ

講義が一くぎりしてまだ時間にならないときなどには、教師は風景やニュースの画片を映して学生に見せ、それで余った時間をうめることもあった。時あたかも日露戦争の際なので、当然、戦争に関する画片が比較的多かった。私はこの教室の中で、いつも同級生たちの拍手と喝采に調子を合わせなければならなかった。あるとき、私は突然画面の中で、多くの中国人と絶えて久しい再会をした。

（「呐喊」自序）

魯迅の小説集『呐喊』（1921年）の自序によれば、医学生・周樹人が文学の道を志すきっかけとなったのは、仙台医学専門学校二年生のとき授業で見た日露戦争に関する幻灯写真のなかの、中国民衆の姿であったという。この話は小説「藤野先生」においても語られ、よく知られるところとなっている。そこには文芸作品としてのある種の創作が含まれていると思われるが、戦争に関する幻灯が学校で上映されたことじたいは、現在残されている資料からも確認できる。

「幻灯」の記憶は、藤野先生の思い出とともに、作家「魯迅」の記憶の中に、重きを置いて永く留められていたのだろう。

6-2 仙台医専六号教室の「幻灯機」〔写真〕

いわゆる「魯迅の階段教室」。ドイツ語・物理学・化学などの基礎科目の教室として使われたほか、細菌学などの幻灯写真を上映する幻灯機も置かれていた。

6-3 魯迅の階段教室〔写真〕

周樹人が在学していた頃は、現在よりも30メートル程度東側に位置していた。内部も若干の改造を受けているようである。

6-4 第二学期医学科第二年度日課表

明治39(1906)年1月

当館蔵 仙台医学専門学校文書 明治三十八年度

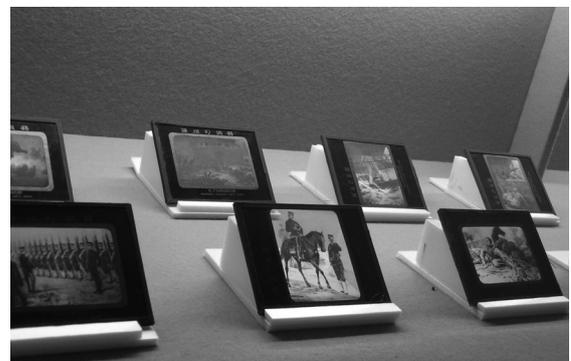
医学科・薬学科日課表

周樹人二年次の時間割。「細菌学」の講義もおこなわれている。

6-5 仙台医専で使用された幻灯用のガラス板

当館蔵

戦争の場面が描かれるが、魯迅が述べているような「処刑」の画面は見あたらない。



7. 「惜別」

7-1 テーマ解説〔パネル〕

惜別

第二学年の終わりに、私は藤野先生を訪ねて、医学の勉強をやめたいこと、そしてこの仙台を去るつもりであることを告げた。彼の顔には、悲哀の色がうかんだように見えた。何か言いたそうであったが、ついに何も言い出さなかった。（藤野先生）

肉体ではなく、精神の改造こそが中国の人々にとって必要だ、との思いを強めた周樹人は、1906

年(明治39)春に仙台医専を退学する。藤野先生は、周樹人が仙台を去る数日前、彼を家に呼び、一枚の写真を一枚手渡した。

裏には「惜別」と二字書かれていた。そして、私の写真もくれるようにと希望した。あいにく私は、そのとき写真をとったものがなかった。彼は、後日写したら送るように、また、時おり便りを書いて以後の状況を知らせるように、としきりに懇望した。(同上)

7-2 「惜別」の写真

明治39年(1906)3月

原資料は北京魯迅博物館所蔵
周樹人が仙台を離れる直前、藤野先生が贈ったもの。裏面に「惜別」の文字が記される。

7-3 仙台医専の日本人同級生による送別会

1906年3月

左端が周樹人。一番町で甘い物を食べたあと、記念写真を撮影したという。

7-4 周樹人の退学に関する清国留学生監督から仙台医専校長への通知

明治39年(1909)3月6日 当館蔵

7-5 周樹人退学の件についての留学生監督への回答(復原資料)

明治39(1906)年3月 当館蔵

7-6 周樹人の退学を追記した生徒名簿

明治38年10月 当館蔵 仙台医学専門学校文書

『明治三十八年九月 生徒名簿』

退学後に周樹人の名前が抹消されている。

8. 魯迅と「藤野先生」

8-1 テーマ解説【パネル】

「魯迅」と「藤野先生」

仙台医専を退学した周樹人は、東京で「精神の改造」を実践するための文芸運動に取り組むが、1912年に帰国し、1912年に北京へと移った。そして1918年(大正7)、「魯迅」の名前で「狂人日記」を発表。以後鋭い筆致で作品を次々と世に送り出し、中国、そして日本でも、広くその名を知られていった。

藤野先生から送られた一枚の写真は、この「魯迅」の書齋に飾られ、彼の心を絶えず励ましつづけたという。

夜ごと仕事に倦んでなまけたくなるとき、仰い

で灯火のなかに、彼の黒い、痩せた、今にも抑揚のひどい口調で語り出しそうな顔を眺めやると、たちまちまた私は良心を發し、かつ勇気を加えられる。そこでタバコに一本火をつけ、再び「正人君子」の連中に深く憎まれる文字を書きつづけるのである。

(「藤野先生」より)

8-2 魯迅と内山完造【写真】

1933年(昭和8)

上海「内山書店」の店主内山完造(1885-1959)は、魯迅の人と思想に深く共鳴し、政府の厳しい弾圧によって上海に逃れた魯迅をかくまい、これを支援した。

8-3 増田渉から藤野巖九郎に宛てたハガキ【写真】

1937年(昭和12)1月

あわら市藤野巖九郎記念館所蔵

1936年10月に魯迅が没した直後、朝日新聞の記者から連絡先を聞いた増田が藤野に送った手紙。魯迅が藤野を「終生の恩師として尊仰」しており、病床でも藤野先生のことを増田によく語っていた、とある。

8-4 内山完造から藤野巖九郎に宛てたハガキ【写真】

1943年(昭和18)10月

あわら市藤野巖九郎記念館所蔵

魯迅の命日に、上海の新聞に魯迅と藤野先生の記事が掲載されたことを知らせている。

8-5 青木正児「胡適を中心に渦巻いている支那の文学革命」(『支那学』第一巻三号)

1920年(大正9)

文学者・魯迅を日本で初めて紹介した論文。青木はこの三年後に東北帝国大学の教授となり仙台に赴任した。

8-6 飯野太郎「仙台医学専門学校時代の魯迅について」

『良陵』39号 1937年2月

当時の学生が医学部の学友会誌に発表した、仙台時代の魯迅の足跡に関する最初の調査報告。学内に残る関連史料の紹介もおこなっている貴重な文献。

8-7 太宰治『惜別』初版本

1945年(昭和20)年

かつての魯迅の親友である老医師を語り手にして、仙台医学専門学校時代の魯迅や藤野先生らの人間関係を描いた小説。第二次大戦末期に執筆された。

9. 学都仙台留学生小史

9-1 テーマ解説 [パネル]

学都仙台 留学生小史

魯迅＝周樹人の仙台留学は、仙台における「留学生」の歴史のはじまりでもある。1904年に魯迅が入学した時2人にすぎなかった仙台の留学生の数は、その後急速に増え、1911年頃には60人を越えていた。その後若干数は減ったが、1942年（昭和17）までの統計で、合計630人以上の留学生が仙台の学校で学んでいる。そのほとんどは中国・朝鮮半島・台湾といった東アジア地域の留学生で、特に中国からの留学生は全体の三分の二近くを占めていた。

このうち「東北帝国大学」に学んだ留学生はおよそ360人。日本人同様の「門戸開放」方針を留学生にも適用した結果、東北帝大には他の大学に比べ多様なキャリアを持つ留学生が入学し、少数ながら女性の留学生もいた。卒業生のなかには、中国現代数学の開拓者として有名な陳建功・蘇歩青など、優れた功績を残した人たちも多い。

不幸なことに、その後戦争によって留学生の数は激減し、戦後も永い間中国大陸からの留学生は途絶えていた。しかし1980年以降、中国や韓国を中心に留学生数は年々増え続けてきた。もちろん中国以外からの留学生も飛躍的に増え、アジア・欧米・アフリカ等世界各地からの多数の留学生が、東北大学で学ぶようになっている。

9-2 (留学生群像) [パネル]

蘇歩青 (1902-2003)

留学期間：1924-1931

中国を代表する数学者。1924年、東北帝国大学理学部の数学科に入学。卒業後は、東北帝国大学構内に併設された



「第三臨時教員養成所」の講師となり、1931年に、微分幾何学の研究で学位を取得した。その後帰国して浙江大学教授・上海復旦大学の教授となり、復旦大学学長もつとめた。中国現代数学の第一人者として活躍し、全国人民代表大会常務委員会委員でもある。1997年には日本政府から勲二等瑞宝章を受章している。

陳建功 (1893 - 1971)

留学期間：1920 - 1929

蘇歩青とともに中国現代数学の開拓者として活躍した数学者。1920年、東北帝国大学理学部に数学科に入学。その後大学院に進み、1929年に、三角級数論の研究で博士号を取得、日本の大学における最初の外国人理学博士となった。帰国後浙江大学や復旦大学で教授となる。1958年には杭州大学副学長になった。



陶燾 (1897- 1952)

留学期間 1923 - 1928

医学者・文学者

文学者「陶晶孫」。九州帝国大学医学部卒業後、東北帝国大学理学部に入学した。魯迅に続く世代の文学者として郭沫若・郁達夫らとともに活動し、東北帝大在学中にも多くの文学作品を発表している。帰国後は上海で魯迅とも交遊を持った。戦後再来日し、東大文学部の講師を務めている。



9-3 蘇歩青の学位申請書

1931年 当館蔵 『学位』19 収載

9-4 仙台日華学友会会章

1913年2月 当館蔵

二高・仙台医専等の留学生と日本人学生34名組成した、在仙日中学生的親睦組織。

9-5 東北帝国大学音楽部主催「モーツァルトのタベ」パンフレット

大正15年10月

当館蔵 東北大学交響楽団史関係資料
留学生陶燾（晶孫）の名が指揮者として見える。

10. 高良とみ旧蔵 魯迅自筆書幅

血沃中原肥勁草

寒凝大地發春華

英雄多故謀夫病

淚灑崇陵噪暮鴉

血は中原に沃いで勁草を肥やし

寒は大地を凝して春華を發す

英雄故多く謀夫は病む

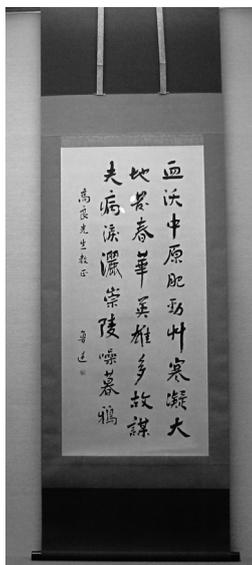
涙は崇陵に灑ぎ暮鴉噪ぐ

(読み下しは、高田淳著『魯迅詩話』1971年岩波書店による)

中国人民の血が多く流されているにもかかわらず「英雄」気取りの要人たちが内紛に明け暮れる、という、当時の中国の状況に対しての、魯迅の激しい批判を込めた詩です。

この資料は、魯迅が、元参議院議員の高良とみ(1896 - 1993)に対し贈った自筆の書で、2010年6月に、高良氏ご遺族の高良真木・留美子両氏から東北大学に寄贈されたものです。高良とみは、キリスト教徒の立場から平和運動や女性運動に参加した人物で、インドの詩人・タゴール(1913年ノーベル文学賞)との交友、戦後の日ソ・日中関係の回復などの国際的な活動で知られています。1932(昭和6)年1月、満州事変によって日中関係が悪化するなか、高良は中国の友人や知識人たちと胸襟を開いて相談したいという思いで、単身中国に渡航しました。上海到着後まっ先に訪れた内山書店で、彼女は店主の内山完造(魯迅の親友)に「中国の新しい作家」魯迅と会うことを勧められ、内山書店の2階で魯迅と食事をします。高良はそこで自分の想いを魯迅に語り、魯迅は高良の言葉に黙ってうなずきながら、かつて日本に留学した頃のこと、藤野巖九郎先生の思い出などを懐かしそうに語ったといえます。当時魯迅には政府の逮捕状が出され、行動や発言が強く制約されている状況でした。

高良はその後急病となり、夫の旧友でかつて東北帝大に留学生していたことのある医学者、陶熾(文学者陶晶孫として有名)の治療を受け、そのまま上海から帰国することとなりました。その帰国に際し魯迅は、内山完造を通じて、この書を彼女に贈ったのです。これらのことは、『魯迅日記』のなかにも記されています。初対面の日本人女性に対し、いったい魯迅は、どのような思いを込めてこ



の書を託したのでしょう。

魯迅記念展示室開設記念ミニ展示 学都仙台の留学生たち —戦前期東北大学の日中交流—

●展示案内〔パネル〕

学都仙台における留学生の歴史は、決して近年にはじまるものではありません。東北大学への留学生だけをとっていても、創立間もない時期から実にさまざまな留学生たちが入学し、卒業後もこの仙台での留学経験をもとに、母国のみならず国際的な場で活躍した人が少なくありません。今回の展示では、当館「魯迅記念展示室」のオープンにあわせ、戦前期に東北帝国大学に学んだ中国人留学生たちの紹介、彼らの学生生活を知ることができる資料を展示いたします。東アジアの激動の歴史のなかで、新しい時代を切り開くために海を渡り、仙台での教師や日本人学生との交友を糧に戦後の人生を歩んだ留学生たち。「魯迅以後」のこうした留学生たちにも、光をあていきたいと思えます。

●戦前期東北帝国大学への留学生〔パネル〕

戦前の東北大学への留学生は合計で445人にのぼるが、日中戦争開始以前の留学生の歴史は、おおきく2つの時期に分けることができる。第一期は、1910年代から20年代にかけて。この時期に東北帝国大学に留学した留学生は、そのほとんどが、大学入学前の高等学校や専門学校(場合によっては中学校)の時から日本に留学しており、長い間日本での留学生生活を送った学生であった。当時中国国内での大学が中国の若者たちを収容するうえで必ずしも十分な数がなく、また日本側でも大学よりも高等学校や専門学校の段階で留学生教育を実施する制度を重点的に整備していたこともあった。東京帝大や京都帝大などが旧制高校を卒業した留学生のみを受け入れていたのに対し、東北帝国大学では日本人学生同様の「門戸開放」方針によって、日本国内の専門学校や高等師範学校を出た卒業生の入学を認めており、この制度によって東北帝大を選んだ留学生も少なくな

かった。

第二期は1920年代から1930年代前半。この時期になると留学生の様相は一変し、ほとんどの留学生が、中国の大学を卒業してから東北帝大に留学するようになった。これは中国における高等教育制度の充実に伴うものである。それは同時に、東北帝国大学が直接中国から留学生を受け入れるようになることを意味し、大学ではこれにあわせ、留学生向けの特別課程の整備をおこなっている。特に1930年代初頭には爆発的な数の留学生が中国から来仙するが、そのほとんどは中国での大学卒業後、大学院レベルでの教育を求め「専攻生」などの短期研究生として入学してきたものであった。留学生の中には年輩のものも含まれ、なかには、思想弾圧を逃れ来日した留学生もいたようである。1937年7月、盧溝橋事件にともない、日本に留学していた中国人留学生の大半は本国へ帰国した。当時法文学部教授であった歴史学者の中村吉治は、本国に帰国する留学生たちの様子をのちに次のように回想している。

毎日いく組かずつ仙台を去ったのだが、一夜親しい連中のたつとき、駅に見送りにいったことは、強く印象に残っている。そこには下宿屋のおばさんたち、町の知り合いの人たちがいっぱい見送りに来ていた。名残惜しそうにあちこちにいく組かずつ語りあっている。話の間に、いくども、「またすぐ帰っていらっしやい」「じき帰ります」ということばが聞かれた。動き出した汽車の窓からは、聞こえなくなるまで、「すぐ帰りますよ」「待っていますよ」と叫びあっていた。両国の戦争は本格的に進展している。しかし民衆は戦っていない。そういう事実が目の前に示された想いであった。(『東北大学新聞』昭和31年9月2日)

●留学生群像〔パネル〕

鄭貞文 (1891 - 1969)

1915年理学部化学科入学

編集者・翻訳家、科学教育家。化学名詞の統一等中国での化学の普及啓発に大きな役割を果たした。1906年15歳で日本に渡り、1910年に旧制二高



へ入学。卒業後も東北帝国大学に進み引き続き仙台で生活、片山正夫教授のもとで化学を専攻した。在学中には東京の友人たちと英漢辞典の編纂もおこなっている。卒業後上海商務印書館に勤務。科学書の翻訳や教科書の編纂などに手腕を発揮した。アモイ大学の創設にたずさわり、同校では鄭が作詞した校歌が今も使われている。

馬廷英 (1889 - 1979)

1927年理学部地質学科入学

戦後台湾を代表する地質学・古生物学者。

中国遼寧省生まれ。日本に留学し東京高等師範学校を経て東北帝国大学理学部に進学、

矢部長克教授に師事した。1934年に理学博士号を取得。1936年に帰国し南京国立中央大学教授となる。帰国に際し研究資料の持ち出しによって官憲に拘束され、矢部教授の奔走により難を逃れたという。

1945年台北帝国大学の接收のため派遣され、そのまま台湾大学教授となり台湾地質学の権威として活躍。台湾時代の住居が最近史跡として整備され一般公開されている。

蘇子衡 (1905 - 1996)

1927年工学部化学工学科入学

化学工学者。台湾・彰化生まれ。慶応中学から旧制六高を経て1927年東北帝国大学工学部に入学。在学中左翼運動に参加、検挙されいったん退学帰国するも1935年に再入学し卒業した。その後北京大学理工学院に招かれ、戦後もそのまま大陸にとどまり、大連大学、中国科学院科学研究所等で活躍した。1983年台湾民主自治同盟(台湾出身者による政党)主席となり、全国政治協商会議

常任委員もつとめている。

由其民 (1913 - 2006)

1936年法文学部経済科入学

元天津社会科学院日本研究所所長。山東省生まれ。北平(北京)民国学院卒業後来日し東北帝国大学法文学部経済科に進学した。当時法文学部



には『資本論』の研究で著名なマルクス主義経済学者宇野弘蔵が在職しており、留学生仲間たちとよく宇野の自宅を訪ねては、宇野に教を請うた。1937年7月日中戦争の開始に伴い、志なかばながらも他の留学生たちとともに集団帰国したが、その際にも宇野の助言があったという。

謝健弘 (1908 - 2001)

1935年法文学部文科入学

社会学者、元中山大学歴史系教授。広東省生まれ。上海中国公学卒業後、インドへの留学を経て1935年東北帝国大学に入学。上海中国公学在学



中から革命運動に参加し、東北帝大在学中も他の留学生たちと『資本論』の読書会を行っていたという。東北帝国大学在学中の1937年、日中戦争の勃発に伴い他の留学生たちと集団帰国。その後、広東法商学院を経て中山大学教授となった。詩集『涵??抄』には留学当時の教授や日本人学生との交友をうたった作品が収められている。

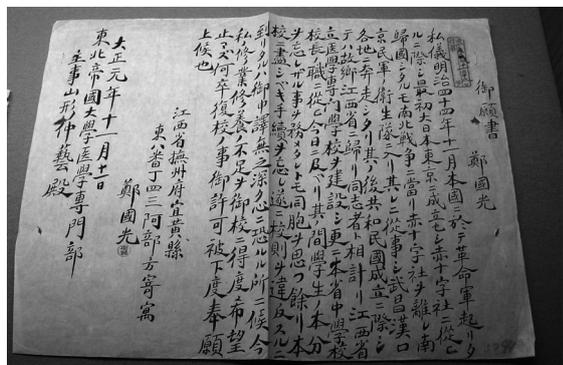
〔ケース内展示資料〕

辛亥革命に参加するため帰国した医学生の復校願

仙台医専文書『願書類 附指令案』

大正元年 (1912) 11月 11日

1911年、辛亥革命の勃発により、仙台医学専門学校に在籍する留学生たちは他の医専の留学生とともに戦地での救護活動にあたる「紅十字隊」を結成した。当時学校側では、事態の沈静後復学希望者にはこれを認めるという方針で彼らを送り出している。紅十字隊が出発する当日の仙台駅のホームには、彼らを見送る藤野先生の姿があった。



蘇歩青書幅 1983年

学会参加のため来日した折、成田空港において村上哲見名誉教授（当時文学部教授）に贈った書。

蘇歩青書幅 1983年

中国数学会代表团として母校を訪問した際に東北大学に寄贈した書。

陶晶孫（陶熾）の小説「特選留学生」

『陶晶孫選集』より 大正14年 (1925) 発表 東北帝国大学留学時代、学資の工面に苦しむ留学生の生活を描いたもの。自身の体験を書いているものと思われる。

由其民「70年前の日中師弟縁—宇野弘蔵先生の追憶」

『中日関係史研究』2007年2期 より 2007年発表

日中戦争開始直前に東北帝国大学に留学した由其民氏が、当時法文学部教授であったマルクス主義経済学者宇野弘蔵との交流を回想したもの。河上肇の謙虚逮捕後資本論を学べる場所として東北帝国大学を選んだこと、中国人留学生による「学生会」が存在したことなど、興味深い事実が語られている。

謝健弘『涵廬詩抄』 1984年刊

かつての法文学部学生であった中国人留学生・謝健弘が、広州中山大学の訪問団に託して母校東北大学に贈ったもの。仙台時代の日本人学生との交流・友情や日中戦争勃発に伴う想いを歌った作品が収録されている。

蘇子蘅 母校再訪時の記念サイン

1980年5月 総務課移管文書『芳名録』

かつて工学部に学びんだ台湾出身の留学生蘇子蘅が1980年に母校を再訪した時に記したもの。蘇は東北帝大在学中に左翼運動に参加して検挙され一度退学するが、その後再入学して無事卒業。卒業後北京大学に招かれそのまま大陸にとどまり、戦後は中国科学院化学研究所等で活躍。台湾民主自治同盟（台湾出身者による政党）主席などもつとめた。